

## 家庭科を核とした持続可能性の教育 ～モノ・コトの価値に着目して～

成田市立公津の杜小学校

### 1 はじめに

現代社会は、キャッシュレス化、ネットショッピング、シェアリングエコノミーなど、消費生活が大きく変わりつつある。持続可能な社会の構築に向けて、子供たちにどのような「見方・考え方」を育てればよいのか。「消費者市民社会」、「エシカルコンシューマー（倫理的消費者）」等も踏まえつつ、消費者としてモノとの関わり方や関わる際の概念を、どのように子供たちが学べばよいのか。こう考えた時に、モノやコトの価値を個々の子供が認識し、自分と価値あるモノとの関わりを考えていければよいのではないかと、そう考えて本研究を進めた。

子供たちは、多くのモノに囲まれ生活している。そして、これらモノとの関わりは、「手に入れる（出会う）」「関わる」「手放す」というサイクル（図1）で成り立っており、年齢が上がるにつれて、自分の意思により行為を決定するようになる。この意思決定には、「モノやコト」の価値が関係する。この価値を見出せるようにするために、6か年を通して、自分とモノとの関わりの学習を系統立ててきた。（表1）

なお、本校では、自分と関わりを自覚した事物・事象を「モノ・コト」というカタカナ表記としている。児童が日常生活の営み（事

物・事象）に着目し、事物・事象を自分と関わりがあると自覚できるようにしたいと考えたからである。

表1 モノとの関わりにおける学年ごとの系統

| 学年                   | ねらい                                        | 価値                                                   |
|----------------------|--------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 1年<br>(学活)           | 自分のモノを大事にする                                | 自分と関わっているモノの価値に気付く                                   |
| 2年<br>(学活)           | みんなのモノを大事にする                               |                                                      |
| 3年<br>(学活)<br>社会科と関連 | モノを大切にしよう<br>～お店で選んで買っているモノ～               | 「手に入れる」コトを知り、金銭とモノの交換を体験する                           |
| 4年<br>(学活)<br>社会科と関連 | ごみって何？<br>～モノのゆく先を考えよう～                    | モノを「手放す」コトを知り、「手放す」コトを考える                            |
| 5年<br>(家庭科)          | 生活を支える金銭の価値と使い方について考えよう～見えない支出との関わり方を考えよう～ | 「手に入れる」「関わる」「手放す」サイクルの中で自分の行動に責任があることを知り、モノとの関わりを考える |
| 6年<br>(家庭科)          | モノとの関わりを考えよう                               | 「関わる」「手放す」責任を考えた上で、モノを手に入れる際の意味決定について考える             |

### 2 学習の連続性・他教科等との関連

#### (1) 1年生

所持品の多くが保護者等の願いが込められたものである。「自分のモノ」が、人の想いによって自分の手元に来たことに気付けば、自分のモノの価値を認識してモノを大事にできるのではないかと、そう考えた。

#### (2) 2年生

本校では、6年生が雑巾を製作して1年生にプレゼントしている。「学校を大事にしてほしい」という「6年生が想いを込めた」＝「価値」ある自分の雑巾と、学校の清掃用具（公

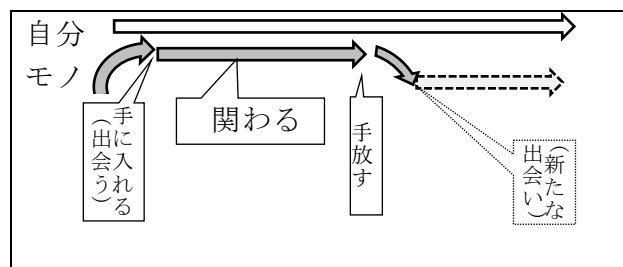


図1 自分とモノとの関わりと意思決定の場面

共のモノ)を比べることで、「みんなのモノ」の価値にも気付けると考えた。

### (3) 3年生

社会科との関連を図った。ここでは、「モノの購入」体験にて、「モノを手に入れる」際の金銭の価値を捉えられるようにした。そして、金銭を支払って「手に入れた」モノは、「購入者のニーズによって選ばれた」価値あるモノだということについて考えられるような学習を仕組んだ。

### (4) 4年生

社会科との関連を図り、個々の児童の「使わなくなり捨ててもよいモノ」はごみか、を考えさせた。不要であっても「想い」のあるモノが捨てられなかったり、「いらない」と思ったモノも実は「ごみ」ではなかったりと、モノを手放すコトを意識できるようにした。

## 3 モノとの関わりを考える(家庭科)

本校では、2年間の家庭科学習において、その都度学習で扱うモノの「手に入れ方」や「関わり方」の学習を行ってきた。例えば、第5学年の「ゆでる」調理学習では、用いる葉菜を店舗で購入する場を設定した。その際、葉菜を選ぶ観点を事前に学習し、店舗での購入に活用できるようにした。(図2)また、この学習は、第6学年



図2 葉菜を選ぶ

の「献立の調理」で使用する食品の購入につながる。ここでは、鮮度や価格、量、他、産地や生産者、添加物の有無等多くの観点を食品を選択し、購入する児童の姿が見られた。また、「縫う」学習で使用する布も、目的に応じた量や品質、価格などの観点があることに気付かせ、自分で用意できるようにしてきた。ここでは、児童と関わる『布の気持ち』を児童に「代弁」させることで、自分と布が関わるコトの価値

を違う角度から見つめられるようにしてきた。

(図3)

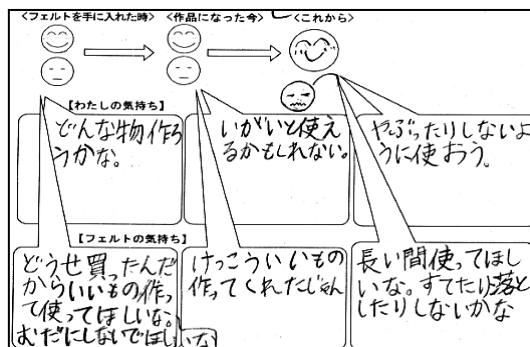


図3 自分の気持ちとフェルトの気持ち

## 4 今後の見通し

キャッシュレス化の時代だからこそ、改めて金銭の価値やモノの価値を意識し、モノを手に入れる際の「等価交換」を自覚することが重要と考えて仕組んだ一連の流れである。今回提案した学習は、これからの時代の消費者教育の一端でしかなく、ましてや「持続可能な社会の構築」のための学習としてはほんのわずかな部分にしか触れられていない。さらに、SDGs(持続可能な開発目標)に示されている行動目標のうち、「つくる責任、つかう責任」「気候変動に具体的な対策を」に触れた程度である。それでも、まずは子供たち一人一人が、自分の生活を見つめ、「当たり前」に目を向け、自分が何を根拠に「モノと関わって」いくかを考えられることが大事なのではないだろうか。そして、モノと関わる喜び、モノを介した人との関わりやこれらの「コト」等に価値を見出した時、人は「生活するコト」そのものにも価値を見出していくのではないだろうか。「Think globally, Act locally」の「Act」が、実際の行動の変容につながるように、モノやコトの「価値」を自覚し、それをもとに判断できるような人が育てられるよう、尽力したい。